

平成28年 産業研究所

福岡県芦屋町まちづくりプロジェクト参加学生 報告書



関西学院大学 産業研究所

■プロジェクトの概要・目的

福岡県芦屋町で行われる、まちおこしの一大イベント「福岡 ご当地さわらサミット」への運営参加を通じて、まちおこしについて学びます。芦屋町では、地域の資源を活かしたまちおこし事業「芦屋町 No.1 プロジェクト」を2015年度より推進しています。特に芦屋町を含めた九州北部において漁獲量が多い「さわら」に注目して、現在各種団体が加工品の開発や販売を進めています。今回、町をあげての大型イベントとして「さわら」をテーマとしたグルメバトル「さわらサミット」を全国で初めて開催することになりました。

本企画では、さわらサミットを視察し、さらに実働として地域の方々と連携しながらイベントを成功させることで地域の課題である、①芦屋町ブランドを確立すること、②集客イベントを行うこと、を体験し、地域と学生が連携し、新しい地域のブランドを作っていきます。

■活動内容

①「実行委員会」へのヒアリングとレポーティング

「さわらサミット」を主催する芦屋町の任意団体「さわらサミット実行委員会」や町役場等に対してヒアリングを実施し、現状の課題、今後のあるべき姿などを模索します。



【さわらサミットチラシ (左)、
さわらサミットに関連する視察を行う実行委員会メンバー (右上)、実物のさわら (右下)】

②「さわらサミット」におけるボランティアサポート

「さわらサミット」とは…

今年、全国で初めて開催される国内唯一の「さわらを使ったグルメ」のみにテーマをしぼった県規模のフードバトル。合計12店舗が福岡県内から集結して、参加者の投票によってグランプリを競います。予測集客は、6,000名。プロジェクト参加者は、ボランティアスタッフとして、「さわらサミット」をサポートします。

■日時・定員

日 時：2017年2月25日（土）～26日（日）

※事前説明会を1月31日（火）18:00～西宮上ヶ原キャンパス産業研究所（データ解析室）で実施。

定 員：5名

■受入先

さわらサミット実行委員会事務局

（芦屋町役場企画政策課企画係、芦屋町観光協会、芦屋町商工会、九州女子大学）

■参加者

人間福祉学部女子学生1名（1年生）

経済学部女子学生1名（4年生）

商学部女子学生2名（3年生）

商学部男子学生1名（4年生）

■目標（各自が設定した参加当初の目標）

- ・まちづくりプロジェクトを運営する側の想いを知り、まちづくりにどうやって人を巻き込んでいくか、学ぶ。
- ・まちづくりプロジェクトの立ち上げノウハウを学ぶ
- ・地域活性イベントに関わる人の働きを間近で観察し、地域活性化ネットワークを体感する。
- ・参加前の目標としては、今まで参加したことのなかった地域活性化系のイベントに参加することで、地方の自治体がどのようにして盛り上げようとしているのかを見て感じる。また、実際に運営されている方や、お客様として来られる方に直接お話を聞くことでリアルな考えや意見を聞き、自分の地元がこれからどうあるべきなのかを考える際の比較対象にできるようになる。この2点がありました。
- ・地方創生プロジェクトの一端に関わることで、ブランディングや広報・集客について学ぶ

■実施内容

<2月25日（1日目）>

- ・さわらサミットへの参加、芦屋釜の里への訪問等を通して観光資源を知る

<2月26日（2日目）>

- ・さわらサミットのボランティアスタッフ

■参加学生がプロジェクトを通して学んだこと

- ・イベントを企画する上で、様々な職業や分野の人が関わり、協力していることを知った。また、それぞれの担当を決め、リーダーを中心に動くことの重要性を改めて感じた。リーダーが、状況を見て判断し、指示や声をかける姿は、リーダーの在り方を考えるきっかけになった。店舗の販売補助としての売り込みをしてはいけないと注意されたことで、イベントを運営する側のボランティアスタッフは、どの店舗に対しても公平な立場でいなければならないことも知った。

一方で店舗に並ぶ客の人数を把握し、商品の残りの個数を調整している中で、店舗と客の間に入り、双方のことを考えながら、判断しながら動くことは、とても難しかった。2日目の来訪者の中に、ニュースで取り上げられているのを見て、このイベントを知ったので来てみたという人がいた。イベントの周知や地域活性化の手段として、メディアの影響力を再認識した。さらに、このイベントを知って、行ってみようと思いを芦屋町に向けさせた魅力や面白さが鯖以外にもあったと思う。鯖サミットと一緒に企画された仮面ライダーショーやお笑い芸人の生ライブなどは家族連れや多くの人を惹きつける大きな存在だったと感じた。

- ・「さわらサミット」の開催自体、第一回目だったが、小規模、スタッフの意欲の高さから、ボランティアを含めた運営側の人員に余裕があったように感じた。イベントの運営や交通整理は上手く回っていた。しかし、早くの時間に売り切れの店舗が続出し、オペレーションの都合で提供時間が長くなり、1時間待ちの行列ができていたこともあった。売り切れの店舗が続出した理由は需要の読み違いから生じる材料不足だと考えられる。客が増えてくる午後になって売り切れの店舗が続出したので、その機会損失は大きいと思う。対策としては、会場の競艇場の食堂を出店者のセントラルキッチンとして活用し、材料不足に対応すべきだと思った。「さわら」だけでもストックがあれば最後まで営業が続けられたはずではないかと思った。また、行列ができていた店舗は2人でオペレーションを組み、家庭用のフライパンで調理するなど非効率的な運営であったように感じた。他店では少なくとも5人でオペレーションを組み、業務用の鉄板やフライヤー等を用いて効率的に運営していたので、出店者にメニューと値段だけではなく、オペレーションの計画も提出させ、無理のないように配慮できる制度が必要と感じた。

- ・一番印象に残っているのは、プロジェクトに関わる方々が並々ならない気概を持って挑んでいる姿である。自治体の方、外部協力の方、出展者の方のそれぞれから感じることができた。それは、きっと自分たちの地域が好きでどうしても盛り上げたいという強い思いがあるからだ。やはり、どんなプロジェクトを遂行するにも気概というものは欠かせないものであり、特に地域活性化を実現させるにおいては、当事者である地域の方の協力が不可欠となるため、今回の第一回目は成功に終わったのだと思う。ただ、地元の来場者の方々は、さわらサミットが開催された意図をよく理解できていないように見受けられたため、今後は地元住民の方をも巻き込んで、地域全体で取り組んでいく必要があると感じた。また、今後芦屋町を持続的に観光地化することを考えたときに、魅力的なところが多くあるのにもかかわらず、観光名所や宿の受け皿が不十分であることが分かったため、外部の意見を取り入れて体制を整えていくことも必要になると考えた。
- ・今回の芦屋町のプロジェクトで学んだことは、告知さえうまくできていると、幅広い年代にニーズのあるコンテンツであれば、集客は意外とうまくいくのではないかとことです。実際にお手伝いに参加させていただいたのは日曜日の一日のみであり、実際の企画された方々の事前準備等については細かく聞くことはできませんでした。しかし、店舗の列の整理として関わらせていただいたことで、列の待ち時間・その店舗の商品についてといった質問から、天気・食べたものの感想・お住いなど、雑談といった形で来場者の方とお話する機会が得られました。場所が競艇場ということもあり、このイベントを目的として来られる方は少ないかと思っていました。しかし、このためだけに来たと言われている方が何人もおり、今後拡大していくのであれば今回のように場所を活かすことができれば芦屋町の認識も高めることができるのではないかと考えさせられました。
- ・想定していたより来場者の多い、盛況なイベントであった。地方の特性か、気さくに話しかけてくださる来場者が多く、こうした雑談や案内のときに運営側が与える印象が今後のイベント運営に大きく影響してくるのではないかと感じた。また、今回は漁業組合や飲食関係者、商工会、大学など地元の関係者を巻き込めていたことが成功の根源にあると思われる。その地域の人々が初回から深く関わることで、口コミによる認知のしやすさに加え、長期的な持続性にも繋がると感じた。これら関係者のモチベーションを保つ意味でも、一回一回のイベントの成功が重要となってくるのであろう。外部から地方創生に関わる際は、①来場者に企画・事業に対してよいイメージを抱かせること②運営には地元関係者に深い関わりを持ってもらうこと③外部の手が引いた後にも持続できる環境を意識すること以上3点が大事であると学んだ。

■今後の学生活動について（活かしたいこと、課題）

- ・ さわらサミット後、芦屋町の変化や人の流れがどう変わったのか色々気になるので、SNSの情報にも目を向けていきたい。
芦屋町を訪れ、鯖の存在も知った経験を大切に、これからもっと芦屋町や、鯖の情報を発信していかなければならないが、どんな発信の仕方が人の関心を呼ぶのか、その点もしっかり考えながら、今後の活動に携わっていききたいと思う。
以前、「東北は地方創生の礎である」という言葉を聞いたことがある。“まちづくり”と“震災復興や被災地でのボランティア活動”には、何らかの関係性や共通点があるのではないかと私は考えている。それは自分の中でまだ明確なものになっていないので、これからはボランティア活動とまちづくり活動、両方に積極的に参加し、自分なりに多面的な視点で物事を考え、繋げていきたい。
- ・ 今回学んだことは、4月からの社会人生活に役立つことが多い。新しいプロジェクトを始める際に気をつける点、一度実施したことに対する課題の洗い出し、課題への対応、問題点の修正などである。これらはPDCAサイクルと呼ばれており、何度も目に触れ、耳に触れる言葉であるが、実際に地方に行きボランティアに携わり、現場を五感で感じられたことで身を持って経験することができた。今回のまちづくりプロジェクトの参加も大変、貴重な経験となった。
- ・ 春から4年生になるので、残り時間でできることも少なくなってきた。私には、学外で参加している団体の建て直しという課題を学生生活が終わるまでに行わなくてはならない。現在、その団体は後輩へ引き継ぎができる状態ではない程の存続の危機にある。メンバーの全員がやる気になることは実はとても難しい。今回のプロジェクトで学んだことは活かせるように思う。まずは、団体やメンバーを好きであること。とても単純であり、基本であるがとても大切なことをすっかり忘れていたと今回のイベント参加を通して気付いた点である。今月中に一度情報交換会や交流会を開催し、少しずつ建て直しを進めていきたいと思う。
- ・ この3月で卒業するため、学生生活ではなく社会人としてどう活かしていけるか感じたことを書きたいと思います。今回のプログラムに参加したことで、イベントを開く際の場所と対象とする年代と、それに合った会場というのが成功するかどうかの大きな要因になると考えました。更に、これから多くの人に認知してもらおうとしている段階であるならば、商品名などは単純で名前をみただけでそれがどういうものなのかわかりやすく、想像できるものの方が興味を示してもらいやすい。また、複数の商品が並ぶイベントの場では相対評価をされるため、価格設定もきちんと考えるべきだと気づきました。将来地元の長崎へ帰ることも考えているため、地域を盛り上げるという点で、必ずしもイベントという手段ではないとしても、この経験からの気付きは活かすことができるのではないかと思います。
- ・ 学生生活における現在の目標は国連ユースボランティアへ参加することである。選考段

階であるため、派遣されるかは未定であるが無事通過した場合は今回の経験を多いに活かすことができると考える。日本と海外で条件に差異は存在するとはいえ今回まちづくりプロジェクトで経験し学んだことが重要になることは変わらないと考える。派遣先の状況に応じたボランティア活動をして成果を出せるよう、この学びを忘れずに行きたい。